

辺津宮の歩き方（本殿と拝殿を含む）

釣川付近にある辺津宮は一般的に宗像大社とも呼ばれ、宗像の三つの神社の中で最もアクセスしやすい場所にあります。本殿と拝殿は重要文化財に指定されています。辺津宮は宗像三女神の末妹・市杵島姫神を祀っています。

神社に入る

鳥居をくぐって参道を進むと、神社で多く見られる金色の菊、皇室の御紋で飾られた正門(神門)に出ます。正門の向こうには拝殿と本殿があります。正門をくぐる前に多くの参拝者は手水舎に立ち寄り、お清めとして冷たい流水で手や口をゆすぎます。

本殿

正門をくぐって最初に見える建物の拝殿は、**1590** 年に建てられました。拝殿の後方にある本殿は、当時の宗像大社で大宮司だった宗像氏貞によって火災後の**1578** 年に再建されたものです。檜皮葺きの曲線状の屋根から複雑に彫刻された赤い庇まで、本殿の外観は広島県宮島の厳島神社(こちらにも三女神を称えるために建てられました)の意匠に似ています。本殿と拝殿に隣接して末社がいくつかありますが、これらは **1675** 年に宗像地方の他の場所から移築されたものです。

古代の祭場

本殿の右側には、三女神が天から地上に降りてきたと伝えられている高宮祭場が続く道があります。高宮祭場は大社そのものより以前からあり、千年以上も前から重要な祭祀の場でした。祭場の北西には玄界灘を挟んで辺津宮と沖ノ島を結ぶ海路が見えます。下って行くと、沖津宮の田心姫神と中津宮の湍津姫神を祀る二つの末社に通じる道が見えます。

宗像地方の古代の祭祀に関する詳細を知るには、辺津宮境内の神宝館を訪問してください。神宝館は沖ノ島の祭場で発見された約 **8** 万点の品々を収蔵しています。